

Title	日本における思想家の個人紙誌：1910年代-20年代を中心に
Sub Title	The role of private magazines of thinkers in Japan
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.83, No. 特別号-I (1990. 9) ,p.27- 37
JaLC DOI	10.14991/001.19900901-0027
Abstract	
Notes	飯田鼎教授退任記念論文集：経済史・思想史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900901-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本における思想家の個人紙誌

——1910年代～20年代を中心に——

小 松 隆 二

1 無視されてきた個人紙誌の重要性

(1)

英国日本研究協会の機関誌“*Japan Forum* (ジャパン・フォーラム)”第2号(1989年10月)において、私は「日本における伝記研究の一つの方法をめぐって (A New Approach to Biographical Studies in Japan: the Role of Private Magazines from Meiji to Early Showa)」という英文エッセーを発表した。それは、同誌の6ページにも満たない短いもので、かつ個人紙誌について伝記研究との関わりで限定的に触れたにすぎないものであった。そこで、その小論をもとに、より具体的な内容を付して、本稿で個人紙誌の問題を再検討することにした。

日本において社会運動家、作家、詩人、評論家、宗教家など広い意味での社会思想家の間に、個人紙誌が流行と言えるほどに盛行するのは、大正に入ってからである。その個人紙誌は、まず明治の終わり頃にその源流を形成し、大正、さらに戦前昭和へと続く時期に育成し、重要な伝達・表現形式の一つとして無視しえないほどの流れにまで成長するに至る。個人紙誌といっても、印刷までいかない手書き・手作りの版画や通信、あるいは印刷といっても手書きをもとに少数数謄写刷りにした程度のものが、友人・知人への御無沙汰に対するお詫びや季節ごとの挨拶、あるいは個人的な身辺事情や感慨を伝える手紙代わりに利用された通信タイプなら、近代でも、恐らく明治初年から繰り返し見られたであろう。それが、後の個人紙誌の原型となるものであり、個人紙誌に到達する直前の型といってよいであろう。

この原型的な単なる個人的通信、従って配布される広がりにおいても、また取り組む姿勢・形式や記事の内容においても、友人・知己に限定されて送られる内輪の個人的で気軽な通信型を超え、また本来手紙のような私信で連絡される純粹に個人的な内密の内容の通信型を超えて、限定的にであれ公開性や社会性を帯びるようになるのは、けっしてそう古いことではない。その源流が明治末ということなのであるが、その時には、送り先も友人・知己に限られる方式、つまり作成者・発送者が一方的に選ぶ方式ではなく、購読料を払うか、申し込むかすれば見ず知らずの一般の人も手にすることができるようになるという意味で、初めて個人紙誌にも不特定多数の読者の形成が見られ

るようになる。その時がまた、たんなる内輪・内密の手紙・通信を超えて、個人通信でいながら、一般性なり社会性も持つ個人紙誌の出発が標されるときでもある。

日本における思想（史）や思想家に関する研究においても、個人紙誌は、まったく無視されてきたわけではないが、これまでは十分に省みられることはなかった。もっとも、個人紙誌よりもはるかに普遍性をもつ新聞や雑誌、それも思想関係の新聞や雑誌でさえ、大正・戦前昭和期のものに関しては、その全貌がなお明らかになっていない現状では、それよりもはるかに広がり狭く小さい個人紙誌が省みられることがなかったり、きちんと解明されるに至っていなかったりしたのは、ある程度仕方ないことであろう。

しかるに、大正以降の個人紙誌は、思想領域に関わるもののみでも、現在から見るときわめて重要な資料ないしは方法といてよいものである。その思想領域のみでも、他国に例がないほど多くの個人紙誌が世に送り出されているだけでなく、その内容に関して、当該思想家の研究にはもちろん、思想、運動、文学、宗教などに渡る広い意味での思想史全般の研究にも、きわめて密度の高い資料を提供する役割を果たしうるものといえてよいだろう。

そのように、個人紙誌は、他のいくつかの領域にとっても同様に、思想史研究にとっても欠かせない資料と言ってもよいのに、その領域の研究者によってさえ、限られた利用・紹介を除けば、これまでは無視ないしは軽視されたままであったのである。

もちろん個人紙誌がこれまで軽視されてきたり、さらに今も軽視されたりしているのには、理由がないわけではない。たとえば第二次世界大戦後に至ると、言論の自由や出版事情の好転から個人紙誌の役割と重要性が低下し、実際にも大きな位置を占める個人紙誌が見られなくなること、その上個人紙誌の盛行した時代である戦前に刊行された個人紙誌の全貌が未だに明らかになっていないこと、しかも比較的名の通った個人紙誌でさえも全揃いとなると、容易には見ることができず、一部を除いてはその所在すらつかめていないほど、きわめて希少の存在となっていることなどがその理由としてすぐに指摘できるであろう。そうでなくとも、個人紙誌どころか、前述の通り思想関係ではもっと鮮明に一般性・社会性を持つ新聞や雑誌でさえも、戦前のものに関してはなおその全貌がすべて明らかになっているわけではないので、狭く限定的な個人紙誌にまで、これまで研究者の目が十分に行き届かなかったのは、ある意味では仕方ないことであったと言わざるをえないだろう。

(2)

日本において、とくに文学や宗教関係を含む広義の思想の領域において個人紙誌の発行が一つの趨勢といえるほど目立つようになるのは、1910年代に入ってからである。明治時代が終わり、大正時代の始まる、この1910年代は、たんに一天皇の時代が終わり、新しい天皇の時代に入ることで、元号が変わったという変化だけではなく、日本における政治や社会の在り方に、あるいはまた文学、演劇、美術など文化・芸術の在り方に、ひいては一人一人の人間の認識や受容の仕方にもゆっくり

とはあるが、しかし重要な転換の動きが見られた時代でもあった。大正デモクラシー下に、政治、経済、教育、社会事業、生活、文学、演劇、美術等における人間化ないしは民衆化の動きを基底に秘めて新しい在り方・目標を追求した動きがそれである。

その時代の推移をつぶさに見ていくと、いろいろの変化や転換の動きをさぐることができるが、その中の重要な動きの一つとして主に国家や全体に関心や重点がおかれた時代から、人間や個人にも関心や重点がおかれた時代、つまり民衆本位のデモクラシーの時代に移行する動きの芽生えも読み取ることができるであろう。第一次護憲運動の高揚や日本における労働組合の最初のナショナル・センターとなる友愛会の設立のような大きなうねり、後に多くの衛星誌を生み出すなど、多大な影響力を持った白樺派の活動（『白樺』の創刊〔1910年〕など）、それに新しい女性たちによる『青鞥』（1911年創刊）、大杉栄や荒畑寒村ら社会主義者による『近代思想』（1912年創刊）、社会主義からキリスト教に変わる小田頼造による『創世』（1912年創刊）など1910年前後に創刊された定期刊行物や展開された動きをいくつか指摘するだけでも、その理解は首肯されるであろう。

この明治が終わり、大正に入る頃から、自己主張や表現・伝達形態の方法として、とくに思想、文学、宗教など、広い意味で思想と一括できる領域で注意を引くようになる一つの新しい在り方が、ここで取り上げている個人紙誌とその刊行であった。見方を変えれば、個人紙誌のあいつぐ登場こそ、そのような国家から人間、あるいは全体から個（個人）に関心や視点が転換する在り方の生成と展開をもっとも鮮明にうかがわせてくれる動きとってよかった。その点では、個人紙誌とその担い手たちは、その1910年代から20年代にかけて一面で時代をきり拓く先端的役割を負っていたと評価できると同時に、他面でその動きはまさに時代の産物でもあったと位置付けることもできるのである。

2 個人紙誌とは何か

ここでいう個人紙誌とは、定期か不定期かは問わず、一般の新聞や雑誌のような継続的刊行物の形態をとりながら、原型的には一個人が編集と執筆のすべてを行うと同時に、編集・発行・配布にともなう責任もすべて一人で負う継続性刊行物である。1916（大正5）年に、『還元録』（春陽堂）を残して、活躍していた東京を離れ、郷里の新潟県糸魚川に帰郷・還元した相馬御風が「一人雑誌」と名乗って、その郷里で刊行した個人誌『野を歩む者』（1930年10月創刊）のように、わざわざ「徹頭徹尾相馬御風一人の執筆に成ります」とか「責任は全部相馬御風が負ひます」と断っているのは、その典型とってよいであろう。

それだけに、記事の内容も日々の雑記、近況などを手紙や日記や雑録に近い私的通信風書き留めることが多くなるが、中には論説や主張、あるいは研究や調査成果のような論稿を載せるもの、さらには詩や小説のような創作中心の同人誌や一般紙誌に近いものも出てくる。当然であるが、どの個人紙誌も、出発当初はただ一人が執筆も編集も配布も担当し、送り先も主に友人・知己に限定

されるといった、先に見た原型に近い形式によるものが普通となる。

ただ、そのように執筆から、編集、発行、配布まで唯一人の個人により、かつ送り先も不特定多数ではなく、自らの友人・知己に限定する、いわば積極的な読者層が形成される以前の純個人紙誌は〈原型〉であって、一般的には当該個人に協力者として周辺的にプラス・アルファ、そして発行を財政的に支える購読者、時には出版社が付く。そのような原型に近くて、しかし若干のプラス・アルファの付く在り方で最も多い形式は、読者からの近況や感想を記した手紙・便りの類を掲載するものである。もともと個人紙誌発行の目的の一つが友人知己との音信の交流や情報の伝達・交換にあるので、読者の便り・感想を掲載するのは、むしろ個人紙誌としては自然な在り方でさえあるといってもよい。

実際にも、この型のものが当該個人一人の純個人紙誌よりも一般的といつてよいだろう。たんなる私的・内密な手紙・便りと違って、わざわざ印刷に付す個人紙誌の方法によるのは、ある面では内密の、あるいは内輪の便りにとどまる私信を超えること、また他のある面では一方通行的な通信としてではなく、読者の対応、つまり交流をも期待していることに狙いもあり、個人紙誌といえども、読者の部分的な協力・参加が普通ということになるのである。

たしかに、読者の手紙・通信、あるいは感想などの反応も載せない原型的な純個人紙誌の例は、探し出すことが難しい。たとえば、たんなる手紙・通信ではなく、内容的には総合的な性格を持ちながら、先に見たように「徹頭徹尾相馬御風一人の執筆に成ります」と断っている相馬御風の『野を歩む者』のようなものでも、読者や友人知己の便りは載せているのである（たとえば「坪内先生書翰抄」〔第33号〕はじめ、会津八一、生方敏郎、小川未明、正宗白鳥、古館清太郎、神田豊穂、巖谷小波、小杉天外ら多くの知友の便りを掲載している）。

ついで、その形がさらに拡大していくと、読者による参加が読後感や近況中心の個人的な便り・手紙の形式を超えて、一般性を持つ随想や小論の形を取る記事も見られるようになる。そこに至ると、もちろん中心は個人紙誌を担う当の本人であるが、本人一個人を超えて執筆者が複数に拡大し、変形した個人紙誌となる。その場合も、本人以外は補助的・部分的な参加にとどまるのが普通である。その点が、参加者同士が対等ないしは対等に近い関係になる同人誌とも異なるものであり、いかに変形しようと個人紙誌の担い手である当の本人が中心になり、責任を負い続けることによって、個人紙誌の形式と枠の中にとどまり続けると言つてよいであろう。

ただ中には、表面的な紙面でみる限り読者の参加が補助的・部分的な位置を超えて、編集にも関与するなど各々が対等に近い位置に立つ関係にまですすんだかに受け取れる個人紙誌の例も見られる。その際、それでもなお個人紙誌と言えるのは、個人紙誌と名乗り続けていること、現実それに象徴されるように個人紙誌を名乗る当人が編集等で最終的責任をとり、中心になり続けていることからである。広い意味での思想家といつてよい加藤一夫は、日本における民衆芸術運動の代表的イデオログの一人で、作家、詩人、評論家、キリスト教徒、アナキスト、農本主義者、後には日本主義者といろいろの間人像・思想家像を見せてくれるが、彼のいくつかの個人紙誌の場合がその

好例である。

たとえば、大正末から昭和にかけて刊行された『原始』（1925年1月創刊）や『大地に立つ』（1928年10月創刊）などは、春秋社による援助が提供された印刷・出版の業務を除いて、執筆と編集に関しては加藤による全く一人の個人紙誌から出発しながら、次第に加藤自身の判断で読者の手紙や通信のみでなく、外部のものにも執筆を依頼し、掲載するようになっていく。そうなると、個人紙誌の枠を抜け出して、加藤の責任編集による同人誌あるいは一般誌の性格をもつに至る。もっとも、その場合も個人紙誌を名乗るのを止めても、編集の権限も責任も加藤一人が負いつけてはいるし、実際にも加藤が中心であり続けていたことも自他ともに認めていたところであった。それだけに、一般的には加藤の個人紙誌と受けとめられ続けることになったのも、多少の不自然さを除けば、さしたる問題ではなかったのである。

それとは逆に、同人やグループの機関紙誌から出発したのに、途中からその中の一人の個人紙誌に変わる例もみられる。中里介山（『独身』）、賀川豊彦（『雲の柱』）、村松梢風（『騒人』）などの例がそれに属するものといってよいが、通常、その場合はもともとその個人が中心になって発行されていたケースといってよいであろう。

いずれにしろ、個人紙誌とは、頭に〈個人〉が冠される以上、原則として一個人が編集も執筆も配布も担当すること、私信や日記に近い叙述をなす場合も見られるが、たんなる私信や日記と違って、内容は公開を前提に執筆されるものであること、1回きりの刊行で終わるものではなく、定期か不定期かは別にして継続的に刊行されるものであること、従って一般の雑誌や新聞と同じように固定した紙誌名を持つこと、通常友人・知人のみでなく、申し込めば不特定多数が読者になりうること、またその読者などから購読料や寄付を集めるのは普通に見られ、むしろそれが個人的な手紙・通信を超える証左にもなるのだが、原則として市販はされないこと、そして言うまでもないが、営利は考慮外であることが要件と言ってよいであろう。これらの点から、西原和治の『地上』、伊藤悌二の『愛生』、大井令淳の『おとづれ』、鳥谷部陽太郎の『兄弟通信』、石田友治の『兄弟愛運動』、石川三四郎の『ダイナミック』『村のたより』などは、個人紙誌とは区別すべきであろう。

なお紙誌名の付け方は多様で、それぞれの個性、信条、信仰、方針に合わせて、たとえば手紙・通信的ないかにも個人紙誌を想起させるものから（いずれも完全な個人紙ではないが、高田集蔵『村落通信』、中里介山『手紙の代り』など）、さりげなく信条・生き方をうかがわせるもの（加藤一夫『大地に立つ』、相馬御風『野を歩む者』、金子白夢『全人』など）、信仰・宗教の薫りが漂うもの（二階堂真寿『迷へる羊』、矢内原忠雄『嘉信』など）、さらには個人紙誌とは無関係な学会誌や研究誌を想起させるもの（赤松良譲『社会学評論』など）までいろいろである。その多様さ、つまり個々に見ると、個性的で各々意味のある紙誌名を持っていることがまた個人紙誌の特徴とも言ってよいのであった。

3 1910年代以降の個人紙誌の流れ

すでに部分的に触れかけているように、論説・評論、文学、信仰などをも含む広義の社会思想や思想家の領域において、個人紙誌が一種の流行のようになり、今日から見ても大きな意味を持つほどになるのは、大正も次第にすすんでから、つまり1910年代の半ばを過ぎてからである。その先駆をなしたのが高田集蔵と中里介山の二人、とりわけ高田集蔵であった。

高田は、明治末から大正、昭和と三代にわたって活動する思想家であるが、徹底した平和主義、非資本主義、非営利主義、そして土地と農作を中心にした自給自足生活の立場を貫いた。現実の生活でも、営利行為や売名行為につながることは耳をかさず、拒否の姿勢を貫いて、経済的にも精神的にも自己に厳しく、それだけに貧窮にもめげず隠士風の生き方を守った。そのため、結婚生活も破綻を繰り返したほどであった。主張や思想の発表も、また信仰や信念の表白も、第二次世界大戦後の時期を含むほぼ生涯にわたって原則として自身の個人紙に拠った。

このような独自の境地を開いたのは、自身の厳しい孤独な精神的・思想的修養、新井奥遼らとの交流など現実生活の中の実践で得たものと言ってよい。決して学校教育などで得たものではなく（これまでの理解では、彼は東京専門学校〔早稲田大学〕法律科中退となっているが、彼は東京専門学校ないしは後身の早稲田大学には入学していないし、そうであれば中退や卒業の事実もない。おそらく興味を持つ学科目を聴講した程度のことが入学・中退の誤伝となって今日に生きているものであろう）、むしろ既存の教育の在り方・制度、そしてそれを土台にする社会的・経済的諸制度を批判し、克服するところに位置するに至っていた。

個人紙誌の刊行に際しては、自ら執筆・編集をするのは当然としても、それだけでなく、資金を節約するためにも、出版活動に最低限必要な家内工業風の印刷設備を自ら持ち、活字拾いから印刷、発送まで、高田自身が取り組んだ。そのみか、機関紙誌の刊行を意図しながら、資金がなく出発あるいは維持できないものにも、活字拾いから印刷も引き受け、協力している。自らの体験から経済的貧窮と社会的活動の間の苦しみを知り抜いた者の配慮と言ってよいであろう。たとえば個人紙を名乗っていないので、形式的には個人紙の範疇に入れることはできないが、実質的には個人紙に近い小田頼造の『創世』の刊行に際しても、高田は小田に助力を申しで、実際にも印刷を引き受けているほどである（『創世』第2号、1913年1月15日）。

当時の個人紙誌の形式、ことに新聞型の形式を作り上げたのは、この高田であった。貧窮の中に自ら活字を拾い、印刷をただけでなく、お金を節約するために、綴じないで重ねたままの新聞形式にしたのは、彼の工夫であったのである。

もう一人の先駆者で、高田に続いた中里は、大著『大菩薩峠』で知られるように、大正期に大衆文学を開拓した著名な作家である。高田とは親友であり、高田の影響を受けて個人紙誌に依拠する在り方を実践するが、彼も創作以外の主張や考えの主たるものは一般紙誌ではなく、その個人紙

誌や個人紙誌に近い同人紙誌・グループ紙誌に発表しつづけた。

この二人に続いて加藤一夫、宮崎安右衛門、有島武郎、賀川豊彦、二階堂真寿、大西悟道、金子白夢、古屋芳雄、堀井梁歩、赤松良譲、武者小路実篤、村松梢風、野沢一（木葉童子）、相馬御風、木村高幸、矢内原忠雄、正木あきらら多くの思想家が個人紙誌の刊行に挑戦する。

彼らは、無名のものが個人紙誌を発行する場合の理由となりがちなように、必ずしも発表する場がないからそうするのではなく、他に発表する場もありながら、むしろ何ものにも拘束されないで、時には厳しい時代状況の中で一定の緊張感をもって、また時には自由に書きつづける場を確保する手段として個人紙誌の刊行に踏み出し、それを維持したのであった。加藤や有島がしばしば一般紙誌からの原稿依頼を断わってまで個人紙誌に依拠したのは、その例である。彼らの場合、執筆の場や機会はいくらでもあったはずであり、しかも外部からの依頼に応じて原稿を書いている限り、その原稿にのみ執着し、構想・執筆することに全精力を注げばよかったのであるが、彼らはむしろそこにとどまることに満足しなかった。あえて執筆のみか、編集、印刷、配布にまで一人で責任を負う在り方、それだけにむしろ負担も、緊張感も大きいかわりに、それを克服した場合の充足感も単なる依頼原稿の引き受けよりもはるかに大きい個人紙誌の発行の方を選択したのである。

4 個人紙誌の種類

以上に見た個人紙誌について、刊行する本人がどの程度関わっているか、つまりまったく一人で運営・維持しているか、それとも個人紙誌といいながら、執筆陣に当人以外のものも協力・参加しているか、その参加度も単なる協力か、それとも個人紙誌の発行人と対等な地点・地位から執筆者に加わっているかといった発行人本人の関与度、つまり発行人を中心とする担い手を基準にした分類についてはすでに紹介した。それに加えて、刊行の目的・狙いや内容の種類・性格によっても、いくつかの類型に区分することができるであろう。

たとえば、その第1は、公開できない純粋な私信ほど狭い個人的なものではないが、手紙代わりないしは友人知己との近況報告、交流の場・手段とする通信型である。これにも先の原型に近い単純・一方的な通信型から、それに対する読者の反応・返信も載せるものまでである。

第2は、言いたいことを誰にも気兼ねなく気軽に自由に発言できる場・機会とするもの、ディスカッション・ペーパーや未定稿のように試行・試作の発表の場・機会とするもの、時にはグループ

* 古屋芳雄の『表現の生活』（1925年7月創刊）は、個人誌とは謳わず、個人「パンフレット」としているが、内容が詩などの創作、論説、評論などにわたり、かつナンバーをふっているのが、個人誌の枠に入れて処理をしてよいであろう。

また高田集蔵、中里介山らと交遊の深い堀井梁歩（金太郎）が編集・発行人となって郷里の秋田から（もっとも10号には、堀井が居を東京・上高井戸に移すとともに、同誌発行所も秋田を離れるが）刊行した『大道』（1925年7月創刊）は、創刊号のみ「堀井梁歩パンフレット」と銘打っているが、2号以下には堀井の個人「パンフレット」のサブタイトルはなくなり、江渡狄嶺、渡辺浩三、中村政人らの便り、感想、詩なども載るようになる。

活動・同人活動の準備紙誌とするものなどである。この型には、それら全体を兼ね、内容の広がりでも総合的な性格、いうなれば総合誌に近い性格を持つものもある。

さらに第3は、思想・信条・信仰を個人的に表白・啓蒙する型である。そこには、個人的すぎて一般紙誌には合わないが、止むに止まれぬ気持から個人の思想・信条・信仰を表白したり、啓蒙したりする場・手段とするものから、もっと厳しい時代状況の下で言論や信仰の自由を守り、自己の主張を曲げないで発表できる機会を確保する場・手段とするものまでである。

上記の第1の例は、高田、中里、加藤、宮崎ら、どの個人紙誌にも何らかの形でうかがえるが、ただ通信型といっても、前にも見たように純粋な個人紙誌は例外といってよい。交通・通信事情の悪かった時代には、後閑林平(群馬県)ら地方在住者のように、手書きの謄写で個人紙誌を通信の役割に利用するものもあったが、そのような地方からのものの方が純個人紙誌の性格を維持することができたと言えよう。

第2の例は、どの個人紙誌にも多少はうかがえるが、加藤一夫の初期のもの、赤神良護らのもののように、専門誌に、あるいは正式に発表する以前に試行的に、あるいは一般誌にはまったく発表する気持がなく書き上げた研究や創作を発表する場として個人紙誌を活用するものに見られる。この分類に入るもので、総合性を持つものとしては、相馬御風の『野を歩む者』のように、通信、詩・短歌のような創作、随想、批評、小論などに広く及んでいるものが例としてあげられる。

第3の例は、高田、中里、加藤、賀川、二階堂真寿、金子白夢、梅原真隆ら宗教家や強烈な思想・信条の持主の個人紙誌によくうかがえる。そのうち、高田、中里、加藤らのように、単に取締り当局に対してだけではなく、同じ陣営でも考えや思想の違う他派からも自立や主体性を守るために利用されるものもあった。さらに第二次世界大戦下の言論の自由が奪われた時代に発行された正木ひろし、矢内原忠雄らのものにもうかがえるように、自由な主張ができないほど厳しい言論統制や抑圧がなされたり、社会全体が自分の考える方向と違う方向にすすんでいるときに、自分の拠り所を確保し、節を守り続ける意思表示の場とする場合にもよく見られる。なお、ことさら個人紙誌とは名乗っていないが、大正・戦前昭和期のアナキズム系機関紙誌には実質的に一人雑誌として個人紙誌の性格に近いものが少なくなかった。

これらの3つの区分全体を通していえることは、どの個人紙誌も単なる個人的・一方的な私信にとどまるものではないが、さりとて一般の、あるいは公的な新聞・雑誌のように誰にも開かれた超個人的なものとも、さらにはより個人紙誌に近く見え、通常小グループによる同人紙誌とも明らかに違うということである。その点で、基本的には個人が責任を持ち続けているかどうかの基本になるので、性格的には近いはずの同人紙誌とも、決して同一ではないことが明らかであろう。同人紙誌といえども、複数で取り組む以上、個人を超えるいろいろの制約や約束ごとが出てくるはずであるが、個人紙誌は原則として他からの一切の拘束や束縛を離れて、自由に思うままに筆を走らせ、編集することのできるものである。同人紙誌も、その性格を多少は残してはいるものの、個人を超える同人間の最低限の約束なりルールは存しているはずであり、その点では個人紙誌に解消される

ものではないのである。

それだけに、個人紙誌にはしばしば生の声、生の感情、生の姿、あるいは未成熟、未完成、未醸酵の考えや理論や方向もさらけ出される。そこには手紙や日記やメモに近い姿勢で綴られる日常生活に関する私的通信・データ・覚書きが含まれることも珍しくない。時には一般紙誌、あるいは洗練された論文やエッセーでは見ることのできない感情の強くこもった主張・論説、評論・批判、感想・随想あるいは整理・淘汰される前の生の、時には思考さ中でまだ十分熟さない発想や視点に遭遇することもある。その方が、見方によっては研究者にとってきわめて貴重である。そうであれば、人間像・思想家像を、内面・心の内を含む全体において理解しなくてはならない伝記・評伝類の執筆には、個人紙誌の発行経験を持つ人物を対象とする場合、それを資料として検討し、活用することは不可欠^{*}といってよいであろう。

5 思想家・思想史研究を豊かにする個人紙誌

これまで日本では、個人紙誌を本格的に取り上げた研究も、また個人紙誌を有効、適切に使って伝記や歴史をまとめた研究も見られない。個人の伝記や研究論文をまとめる際にその人物の関わった個人紙誌を簡単に上げる程度のもは見られたが、個人紙誌をとくに重視し、全般的な推移を理解した上で、その意味づけや役割・動向をきちんと行って取り上げたものはないに等しかった。

それでも、ようやく最近に至って、なお著名なものに限られてはいるが、中里介山、加藤一夫、賀川豊彦、正木ひろし、矢内原忠雄らのもののように個人紙誌の復刻やそれに対する言及・評価が少しずつ見られるようになってきている。それだけに、まだその系譜や全体像をきちんと掌握して、その中に明快に位置付けつつ取り上げるところまでは依然としてすすんではいないが、そのようなレベルでの理解や研究を手掛ける条件が少しずつ整備されつつある^{*}といってよいだろう。

もともと、個人紙誌そのものが一般にはよく知られていたとは言えないが、実はそれに関する研究者の間にさえ、実態や全体像がきちんと理解・掌握されていたとは言えないものであった。というより、理解や掌握どころか、研究者でそれに関心を示す程度のものでさえ、そう多くはなかったのが実情である。それだけに、研究対象にしようとする思想家なり宗教家なりが個人紙誌を発行したことがあり、かつそれが研究をすすめる上で依拠したり言及したりすることが不可欠なほど重要な場合でも、これまではまったくそれらに依拠も言及もしていない伝記や評伝も成立しえたのである。たとえば個人紙誌の先駆者の一人である中里介山に関する伝記・評伝にもその例が見られる。

中里は広く知れわたった作家であるだけに、彼に関する伝記・評伝もいくつか世に送り出されている。ところが、その中には尾崎秀樹、松本健一らによる中里に関する著名な評伝を含め、中里の

* なお第二次世界大戦後になると、以上の分類に入らぬ例として、「春山行夫エッセイ雑誌」を名のつた個人誌『ペンギン』（1951年1月創刊、技術資料刊行会）のように、出版社の責任で企画、編集、発売する個人誌の例もでてくる。

個人紙誌についてはまったく触れていないか、触れていても正確ではない扱いにとどまる著作も見られる。

中里は、生涯を通じて『独身』『手紙の代り』『孤立者の通信』『峠』など個人紙誌ないしはそう呼んでも差支えない性格の機関紙誌をあいついで刊行している（ほかに『隣人の友』など個人紙ではないが、個人紙に近いものもある）。しかもそこには中里の肉声が溢れており、彼の人生、社会、文学、映画、演劇、戦争、天皇などに関する重要な視点・主張、思いがけない交遊関係もうかがうことができるのである。

このように個人紙誌の先駆者の一人で、かつ明治末から大正、さらに昭和にかけて紙誌名を変えつつ、繰り返し個人紙誌を刊行し続けた人物の生涯と思想を綴るのに、その人が自らの精神、主張、思想、信仰、生活、芸術にわたって日常の中から表白した個人紙誌をまったく素通りしてしまうなどということは、考えられないことである。しかるに、現実には個人紙誌を素通りする研究状況がこれまでは支配しつづけてきた。たしかに初期的研究や概括的研究の段階では、それでもことさら問題はなかったわけであるが、より深い研究、より内容豊かな研究にすすむには個人紙誌の利用は欠かせないはずである。そして今やその段階に到達しているといっても言い過ぎではないであろう。

ただそういった個人紙誌を無視ないしは軽視してきた研究者やその研究にも、これまでは同情すべき点が多かったわけではない。すでに指摘したように、これまで戦前の個人紙誌が一般にはまったく見る機会が多かったわけではないが、専門家でも容易に入手することはもちろん、見ることも簡単ではなかったという事情が、それである。個人紙誌であれば、もともと発行部数も少数であった上、今日まで保存されている部数ということになったら、きわめて少数か、極端な場合は方々に散らばっている各号を合わせて辛うじて1部揃うかどうかという残存状況にあるものさえある。それだけに専門の研究者ならその所在を確認しているものでも、初学者や一般の人にはもちろん、かなりの研究者にとっても所在を確認できないものも少なくなかった。そこに、実は個人紙誌の広い利用を妨げてきた大きな問題も存していた。そして、それを何とか打開すべく策を検討することが現在の課題になっているのである。

6 個人紙誌をめぐる当面の課題

本稿では、私は戦前における日本の個人紙誌の全貌、あるいはその一部であれ、具体的に一つ一つの内容に立ち入って実態を紹介、分析し、全体を明らかにする作業をすすめるつもりはない。私がここで言及したいことは、個人紙誌の流れやその状況の概要を紹介しつつ、それが大正・戦前昭和期における広義の思想家や思想史研究においてきわめて重要な資料であること、にもかかわらず、それらがきちんと調査・検討・整理もされずにきたこと、そのため今に至っても十分に利用される条件が形成されるに至ってはいないこと、加えて以下に述べるその利用にまつわる問題の所在に関することともである。

第二次世界大戦前は、出版活動、とりわけ思想活動につながる左翼系や進歩的性格の出版活動に対しては、出版どころか、利用や所有することに対してさえ厳しい取締りがなされるのが一般的であった。そのため、労働運動・社会主義運動の機関紙誌はじめ、進歩的な文芸、演劇、映画、美術、文化、教育、医療、福祉、労働、思想、社会科学関係の機関紙誌類は安定的に刊行することも、そして広く配布することも、きわめて困難であったし、その後の保存にしてもはなはだ困難なものが付きまとった。

それでも、マルクス主義系のものは、研究者が多かったこともあり、戦後に至って比較的研究も調査もすすめられてきたので、まだ良好の方であろう。しかし、それ以外の系統のものには、これまで発行状況も、残存状況も綿密には調査されないままになっているものが珍しくなかった。ましてやさらにマイノリティな位置しか与えられなかった個人紙誌ともなると、発行状況も、残存状況も、概要としてさえまだきちんとは明らかにされていず、むしろ本格的な説明は今後に残されたままである。

このように、戦後に至って思想家や思想史研究の領域でも、いろいろの方法やいろいろの側面で研究上の進展が見られたのに、例外的に軽視されてきた資料の一つが個人紙誌であった。それだけに、広く利用できる条件が整備されれば、個人紙誌は資料の宝庫のような役割を果たしえ、研究の進展には間違いなく寄与するものと思われる。

そこで、当面は、戦前全体にわたる希少な一般機関紙誌とともに、さらにいっそう希少と言ってよい個人紙誌の発行状況、および今日の残存状況を精密に調査すること、そしてそれらを誰もが利用できる状態に整備することが必要である。それには多くの人々の協力も、連絡の場となるセンターの設置も必要と思われる。この点を最後に指摘し、また以上のような概括的紹介ながら、今後個人紙誌への関心が強まるための素材を提供することで、近い将来に個人紙誌の保存と利用が可能になる状態の到来を希望しつつ本稿を閉じることにしたい。

[本稿の執筆に際しては、山梨県立文学館の後閑(後閑林平旧蔵)文庫の御世話になった。心より御礼申し上げたい。]

(経済学部教授)